

# 重要文化財



## 五・重要文化財



### 日吉神社本殿（県重文）

主神・大己貴神をお祀りした本殿。「寛永七年庚午霜月八日 尾張松平大納言」の棟札が残っている。尾張藩初代徳川義直公の寄進による。桧皮葺流れ造り、朱塗りの社殿。向拝の両柱および梁、本殿に向かつて左側の屋根の破風の一部が修理してあるほかは、完全に原形を残している。江戸時代初期の社殿建築の代表的な貴重な建物である。

社殿の規模は、

御拝の間口 二・五七㍎

階段の幅 三・五七㍎

階段の数 五段

向拝より上段までの奥行 一・五㍎

本殿間口 六・一五㍎

正面および左右の廻廊の幅各々 一・三㍎

本殿奥行 五・四㍎

基礎より廻廊までの高さ 一・五㍎

勾欄の幅 二・五七㍎

高さ 四六㍎

本殿の柱 直径二五㍎の丸柱

軒高 二・八八㍎

廻廊を含めた総間口九・二七㍎の三間作り朱塗り

屋根は桧皮葺流れ造り

棟の冠木には左三つ巴の金紋が七個付いている。

社殿は長年の風雨のためいたみが甚だしくなったので、昭和六十年に修理と彩色を施した。

## 百八燈一對（県重文）

日吉神社玉垣中央石段の左右にある。左右合わせ百八の燈明が点くので百八燈と呼ばれている。元來百八燈は寺院の内陣の境等にあるもので、神社の社前にあるものは殆んど皆無と云っていい程珍しいものである。往時の神仏は一躰との思想から来たもので、神仏混着の名残として貴重な存在である。中に安置してある燈明台は縦一・二五寸の中心の骨に左右に五本の腕が出て、この腕に燈明皿を受ける丸い輪が付いて、一基で五十四ヶの燈明皿が乗るようにできている。中央の心金の寸法は幅二・五寸、厚み六ミリの平鉄で、中心と腕を連絡する外側の平鉄が、丁度木の葉形にふくらんでいる。中心の鉄に「日吉山王権現、田代 五門、下に宝永三年一月吉日」の文字がタガネで彫ってある。



日吉大宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	鳳凰	高五〇センチ
屋根	全面巻雲に竜	高六六・六センチ
胴体	四角	高九八・五センチ 幅九八・五センチ
鏡	四枚	径三三・三センチ
柱	前	張果老ほか仙人画(高橋杏村による下絵)
後	無し(図案は現存)	
御座	高一九・七センチ	幅一三九・三センチ
吊棒	図柄	波に飛竜と岩
吊棒金具	前	獅子頭・太鼓を持つ舞姿
後	三つ巴	



全長	二七一センチ
全高	九一・二センチ
御座高	七一センチ
幅	一〇・五センチ



日吉二宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	鳳凰	高三三・三センチ
屋根	四方五七の桐	高六九・六センチ
胴体	四角	高九六・九センチ 幅九六・九センチ
鏡	四枚	径二一・二センチ
柱	前	神武天皇の東征
後	南北朝戦陣	
御座	高一八・一センチ	幅一三六・三センチ
吊棒	図柄	波に千鳥
吊棒金具	前	唐草模様
後	唐草模様	



全長	二六一・五センチ
全高	九二センチ
御座高	七一・五センチ
幅	八センチ



日吉宇佐宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	鳳凰	高三三・三
屋根	四方丸に三葉葵	高六九・六
胴体	四角	高一八・一
鏡	四枚	径二四・二
柱	左 右	下り竜
御座	左	昇り竜
吊棒	長	高一六・六
吊棒金具	右	幅一三八・一
	左	幅四〇〇
		波に千鳥



全長	二七八
全高	九四
御座幅	七二
高	一〇・五

日吉樹下宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	鳳凰	高三三・三
屋根	四方七曜の星	高五〇
胴体	四角	高九五・四
鏡	四枚	径三〇
柱	前	唐獅子に岩笹・水の流れ
御座	後	右 牡丹に蝶
吊棒	長	高一八・七
吊棒金具	前	幅一三七・八
	後	幅四〇六
		波に千鳥



全長	二八三
全高	八四
御座幅	七二
高	八・五

日吉客人宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	鳳凰	高三三・三寸
屋根	四方優曇華の花	高六九・六寸
胴体	四角	高九三・九寸 幅九六・九寸
鏡	四枚	径二七・二寸
柱	養老の孝子源之丞	後 詩文
御座	楠公櫻井の別れ	後 詩文
吊棒	高一八・一寸	幅一三九・三寸
吊棒金具	図柄	波に千鳥
	長	四〇九寸
	右	優曇華の花
	左	優曇華の花



全長	二七三・二寸
全高	九四寸
御座高	七四・二寸
	九・八寸

日吉牛尾宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	擬宝珠	高二四・五寸
屋根	八方十六花弁菊花	高四〇・九寸
胴体	八角	高九〇・九寸 幅五一・五寸
鏡	八枚	径一八・一寸
柱	昇り竜・下り竜	
御座	高二一・二寸	幅一四二・四寸
吊棒	図柄	波と亀
吊棒金具	長	三八〇・三寸
	右	唐草模様の中に十六花弁菊花
	左	唐草模様の中心に十六花弁菊花



全長	二二九寸
全高	九三寸
御座高	七五寸
	九寸

日吉三宮神輿(大神輿は県重文・中神輿は町重文)

上部金具	擬宝珠	高二二・七 <sup>㍉</sup>
屋根	四方鳳凰	高四〇・三 <sup>㍉</sup>
胴体	四角	高一〇〇 <sup>㍉</sup> 幅一〇〇 <sup>㍉</sup>
鏡	四枚	径二七・二 <sup>㍉</sup>
柱	麒麟	後 昇り竜
	龜	後 鳳凰
御座	高一六・六 <sup>㍉</sup>	幅一三六・三 <sup>㍉</sup>
	図柄	波に千鳥
吊棒	長四〇〇 <sup>㍉</sup>	
吊棒金具	右 十二曜の星の中心に福槌	
	左 十二曜の星の中心に福槌	



全長	二六七 <sup>㍉</sup>
全高	九九・五 <sup>㍉</sup>
御座高	七〇・五 <sup>㍉</sup>
幅	九・三 <sup>㍉</sup>

三重塔（国重文）



塔の大きさ  
初重 方一〇・五〇  
二重 方一〇・二〇  
三重 方九・〇二  
露盤下までの高さ  
相輪上までの高さ

軒高  
軒高  
軒高  
四・七〇  
三・九〇  
一・七〇  
一・七〇  
二・六〇

塔の構造  
三層塔婆・毎層三間、組物三手先 軒二重檼 初重  
勾欄は天井拭板 屋根柿葺 相輪鉄製  
この塔は、天正十三年（一五八五年）稲葉一鐵修  
造の棟札が善学院に遺つてゐるが、それより約七十年  
程前に齊藤伊豆守利綱が建立したものであるといわ  
れてゐる。  
塔の建築様式に、室町時代の豪壮華麗な様式を伝え  
てゐる。幸いに兵火を免れ天正の修造を経て、貞享年  
間の大修理が行なわれた。  
初層入口の棧唐戸にある三つ巴紋の裝飾彫刻は貞享  
の補修といわれてゐる。かつて文部省の手で解体修理  
をしたとき、礎石の位置を検べた結果、今の塔より十  
五呎ばかり広くなつており、この塔以前に塔があつた  
ことが判つた。昭和二十三年にも解体修理が行なわれ  
たが、昭和三十四年の伊勢湾台風で塔の東側にあつた  
大木が倒れて塔の屋根を破損し、塔頭の相輪が少し傾  
いたのも、昭和三十七年に補修された。平成二十二年  
八月にも落雷により三層屋根部分に損傷を受けたが、  
補修され現在に至つてゐる。  
三層の屋根が聳えてゐる姿は実に美しい。くつきりと



狛犬一対（国重文）



この狛犬は、西の保城主不破河内守光治の寄進によるもので、本殿に向かつて右畔形の前左趾外側に、天正五丁丑季（一五七七）五月吉日、左阿形の前右趾外側に、不破河内守光治造立と彫つてある。  
 一般の狛犬は、右が阿形左が畔形であるのに、この狛犬は右が畔形一角獣左が阿形という大変珍しいものである。全体として縦長で像高七四センチ笏谷石を用い、たてがみは他の文化財の狛犬と同様流れるような線をなしてあり、簡素であるが垢抜けのした力強い彫刻である。大正三年国宝に指定されたが、戦後国の重要文化財に再指定された。本体は収蔵庫に保管され、複製が本殿両脇に飾られている。

台座に、大正十四年杉山令吉（三郊）・書の来歴が刻まれている。

此係天正五年不破河内守所献。刀法横茂古色黝然  
 輝映。夫三層浮罔爛放異彩。為日吉神域雙壁矣。大  
 正三季官選定國寶焉。頃鄉人胥謀造蹲座安置其上。  
 索余大書國寶二字。以傳千永遠云。

大正十四年能集乙丑四月從五位杉山令吉敬撰

十一面観世音菩薩像（国重文）



藤原時代の様式をもち、胡粉地極彩色の施された観世音坐像である。穏やかな面貌、豊かな胸の肉は、彫りは浅く肩から背部、両腕への流麗な線、柄衣の波状紋の線、薄い膝、藤原期の彫刻の特徴を象徴している逸品である。惜しいことに両手とも上膊部から下が欠落しており、化仏は一体のみ残っている。坐像で極彩色である。

十一面観世音菩薩像（国重文）



藤原時代の様式をもった坐像で、胡粉地彩色が施されたもの。右手が肘から欠落し左手の指も折損している。右手が肘から欠落し左手の指も折損している。傷みが激しい。刀法が簡素な仏像で神像に近い趣が感じられる。特に面相が豊麗で目鼻が非常に美しいといわれる。彩色の跡も随所に残っており、製作された当時の優美さが髣髴される。彩色坐像で一木彫である。

地藏菩薩像（国重文）



この像も破損して、右手の印を結んで  
おられる指と左手の手首から先が欠落している。極  
色の名残は多く残っており、僧衣の紋様が胴や裾の一  
部にその跡が見られる。顔や首、右手の一部には彩  
が残っている。像の高さは三四・三<sup>半</sup>寸である。  
がしのばれる。像の高さは三四・三<sup>半</sup>寸である。